

中学校用

ヨシト

「おい、アツシ。ちよつと。」

ヨシトと昨日見たテレビの話をしていると、コウジがぼくを呼んだ。話を途中で切り上げて、コウジの方へ行くぼくを、ヨシトは笑顔で見ている。

ヨシトはぼくの幼なじみで、同じ小学校からこの中学校に来た。小学校のころから、ヨシトはあまりしゃべらない。ぼくとは、けっこう自分の好きなことなんかをよく話すのだが、学級の友達に話しかけることはほとんどなかったし、周りに合わせることとか、その場の雰囲気を感じて振る舞うことが苦手だった。そのせいもあるのか、割といつも一人でいることが多かったが、いつもニコニコと笑顔を絶やさないヨシトを、うちのお母さんなんかは小さな頃から可愛がっていた。

何事にもマイペースなヨシトは、みんなを待たせてしまうこともよくあつて、ヨシトのお母さんは、

「アツシ君。ヨシト、ちゃんとやつてる?。」

とよくぼくに聞いたものだ。小さいころから知っているぼくを、頼りにしてくれているのだと思うとうれしくなった。

低学年のころは、ヨシトのお母さんの仕事が忙しいせいもあつて、よくうちにヨシトを泊めて兄弟のように過ごしてきた。でも、高学年くらいになると、ぼくも他の友達と遊ぶことが増え、ヨシトと遊ぶことは減っていった。ヨシトは一人でいることが多かったように思うが、それを苦にするようでもなく、誰かに声をかけられたら、その子と一緒にいた。ヨシトは自転車が好きで、放課後にぼくが友達と遊んでいると、自転車に乗って一人であちこち走り回っている姿を見かけたものだった。

そのころから、何となく学級のみんなが、表立ってこそ言わなかったが、陰でヨシトのことをかわつてるとか空気の読めないやつだなんて言うようになった。

中学校に入ると、ヨシトはさらに周囲から浮いた存在となった。学級でも一人であることが多く、しゃべる友達もぼくだけだった。

「アツシ、お前、ヨシトと仲がいいんだろ。」

「え、うん。まあな。」

「あいつ、かわつてるよな。女子なんかよく言ってるぜ。ニヤニヤして何考えてるか分からないって。話にも入ってこないし、入っても空気読めないし。」

いくら何でもそれはないだろ。ヨシトが何か人に嫌がられるようなことをしたのか。ぼくはそう言いたかった。でも、言えなかった。

ヨシトがいつもの笑顔でこっちに来た。コウジとタカフミは顔を見合わせて向こうへ行つた。

「ねえねえ、アツシ君。昨日テレビ、何見た?。」

「え、テレビか。いや、昨日は勉強してて見てないな。」

バラエティ番組を母さんと大笑いしながら見てたことを思い出しながら、ぼくはついそう言ってしまった。

「そう。ぼくはね……。」

「ヨシト、ちよつと用事思い出した。またな。」

そう言つて、ぼくは廊下に出て行つた。何だか教室中のみんながぼくたちの方を見ているような気がしたのだ。

その日から、改めてヨシトへの学級のみんなの冷ややかな視線が、ぼくに強く感じられるようになった。あるときは、授業中に、みんなに紙が回されていた。ぼく

のところを回ってきたそれを見ると、ヨシトのことが書いてある。ヨシトを見ると、何も知らず、いつものニコニコ顔で黒板を見ていた。周りのみんなはそんなヨシトを見てクスクス笑っている。ぼくは、回ってきた紙切れを握りしめた。

ある日の放課後、部活を終え、コウジやタカフミと別れて家まで一人で歩いていたぼくは、道端でヨシトに出会った。ヨシトは自転車をとめてゴソゴソ何かやっている。

「ヨシト、どうしたの。」

「あ、アツシ君。チェーンが外れたから直してるんだけど……。」

見ると、手は油で真っ黒。拾った棒切れで、外れたチェーンをかけようとしているようだ。

「もう少しなんだけど。なかなかうまくかからなくて……。」

「ヨシト、もうその自転車ずいぶん古くなったし、小さいだろ。新しい自転車買ってもらえよ。そうすれば簡単にチェーンが外れたりしないしさ。」

ダサい自転車とか、今度は自転車のことでバカにされたりするかもしれない。そう思つてぼくは言った。するとヨシトはいつもの笑顔で言った。

「うん。でもさ、この自転車、五年生の誕生日にお母さんが買ってくれたんだ。喜んでるぼく見て、お母さんの方がうれしそうだったんだよね。新しいのに乗りたいたいと思うこともあるけど、この自転車が好きだから。確かにずいぶんボロくなったけど、ちゃんと直せばまだまだ走るよ。」

その言葉に、ぼくは胸をつかれた。みんな新しいのを買ってもらってる、小さな自転車なんか恥ずかしくて乗れない——そう文句を言つて、中学校に入ってから新しい自転車を買ってもらったぼくだった。買ってもらったものを大切にしているヨシト。わがままを言わないヨシト。小さいころから、近くの工場へ働きに行つていたお母さんの様子を、ヨシトはいつも見ていたからかな。ぼくは自分のことばかり。家族のこととか仕事のことなんて考えてこなかった。あまりしゃべらないヨシトは、自分よりずっと家族思いで大人だ——。

「アツシ君、直ったよ。」

ふと見ると、ヨシトを見ながら一人の女子が顔を見合わせてクスクス笑いながら通り過ぎていった。ぼくは、腹の底に何か熱い塊が生まれたことを感じた。

ヨシトがうれしそうに顔を上げた。油の付いた手で鼻の下をこすつたヨシトの顔には、見事なヒゲが生えていた。

「ヨシト、ティッシュ。」

ヒゲを生やした顔でニコニコ笑うヨシトにティッシュを渡しながら、ぼくはしっかりと顔を上げた。



- ぼくはなぜ話しかけてきたヨシトにうそをついたのか。
- 笑うみんなを見て、アツシがたまらなくなつたのはなぜか。
- 熱い塊とは何か。また、しっかりと顔を上げたアツシは何を思っていたか。

9 中学校用「ヨシト」 指導例

本資料は、主人公アツシと友達ヨシトを取り巻く集団の様子を描いている。資料中で、ヨシトは「空気が読めない」と言われているが、「空気が読めない」という表現は、状況にふさわしい言動ができない人に対してよく使われるものである。軽い気持ちで使われることが多いと思われるが、場合によっては相手への蔑みや偏見につながることもある表現であろう。主人公の気持ちの変化を考えることを通して、正義を実現しようとする強い意欲や態度を育むとともに、他者に対する正しい理解や共感しようとする心など、他者への見方や考え方を広げ深めるきっかけとさせたい。

本資料の活用にあたっては、ヨシトのことを周囲の者たちがどのように考えているのか、また、アツシの態度は其中でどう揺れ動いたか、それぞれのものの見方について、しっかりと話し合えるようにしたい。また、「空気が読めない」ということを取り上げ、読めない者は排除されなければならないのか、そんな空気は誰がつくっているのかについて話し合うなど、生徒が自分たちの学校生活などを振り返って考えられるようにし、自分たちの問題として考えを深め、正義を重んじ、公正、公平なものの見方や考え方を大切にし、差別や偏見をなくすよう努力しようとする意欲を高めたい。

なお、学級等の実態により、例えば、本資料に描かれた状況から学級の生徒個人が連想されるような場合は、本資料は活用しないなどの配慮が大切である。

- ◆ **主題名** 正義の実現 指導内容 4-(3)
- 資料名** ヨシト (奈良県教育委員会)

◆ ねらい

アツシの幼なじみであるヨシトに対する周囲のクラスメイトの見方や、ヨシトやクラスメイトに対するアツシの言動や思いについて考えることを通して、他者に対する正しい理解や寛容さなど、他者への見方や考え方を広げ深める機会とし、正義を重んじ、誰に対しても公正、公平にし、差別や偏見をなくすよう努力しようとする意欲を高める。

◆ 展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される生徒の意識	指導上の留意点	備考
導 入	1、「空気が読めない」という表現の意味について話し合う。	○ 「空気が読めない」という表現はどんなときに使われるのだろうか。 ・その場の雰囲気を考えて行動できない人に対して使う。 ・空気が読めない人間をからかったりバカにしたりするとき。	・自由に話し合わせ、自分たちの問題として考えるきっかけとする。	
展 開	2、資料「ヨシト」を読んで話し合う。	○ アツシはなぜ話しかけてきたヨシトにうそをついたのだろうか。 ・ヨシトのことで自分もからかわ	・ヨシトに対するクラスメイトの見方がおかしいと思いつつも言えない主人公の姿に着目させ、ヨシトと関わ	

展 開	3、自分を振り返る。	<p>れるのは嫌だから。</p> <ul style="list-style-type: none"> • みんなに注目されているように思えて、その場から早く離れたかったから。 <p>○ 笑うみんなを見て、アツシがたまらなくなったのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ヨシトを笑いものにするクラスメイトへの怒りのため。 • 何もできない自分への情けなさを感じたから。 • ヨシトのことを友達だと思っているから。 <p>◎ 熱い塊とは何だろうか。また、しっかりと顔を上げたアツシは何を思っていたのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ヨシトを笑う者への怒り。ヨシトを笑う者を許さない。 • 弱い自分と訣別する決意。これからははっきりと自分の考えを言おう。 • ヨシトへの友情。ヨシトとはずっと一緒にいよう。 <p>○ 読まなければならなかったり、読めない者が排除されたりする「空気」とはどんなものだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 互いに気を遣いながら付き合う閉鎖的な仲間意識。 • 友達をからかったり笑ったりすることを楽しむような雰囲気。 • ラインなどでつながっている集団の意識。 	<p>っている自分に対するクラスメイトの目が気になる主人公の思いについて考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ヨシトと一緒にいる自分へのクラスメイトの見方が気になっている主人公の思いを押さえ、周囲のクラスメイトと同じ立場に立ってヨシトを見てしまっている自分自身へのたまらなさにも気付かせたい。 <p>• これまで一緒にいて知っていたヨシトのよさや家族への思いなどに改めて気付き直した主人公の思いに共感させるようにし、自分自身の弱さと立ち向かい、ヨシトに対するクラスメイトの偏見をただし、正義を貫いていこうとする主人公の強い意志をとらえさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ワークシートに書き込むことを通してじっくりと考えさせ、それを基に積極的に話し合えるようにする。グループで話し合わせてもよい。 <p>• 自分たちの学校生活などを振り返り、見直すことを通して、自分たちの問題として考えさせ、正義を実現しようとする意欲や態度とともに、公正、公平なものの見方や考え方を大切にしようとする思いを育むようにする。</p>	ワークシート
	終末	4、「心のノート 中学校」を見て、読んだり書き込んだりする。	<p>○ 「心のノート」100～103ページを見ましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「心のノート」を活用したり、指導者の体験を話したりして、正義を大切にし、差別や偏見をなくすよう努力しようとする意欲を高めるようにする。 	「心のノート」

※「心のノート」は、次のURLよりダウンロードできます。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1302318.htm

道徳ワークシート

名前 ()

熱い魂とは何か。また、しっかりと顔を上げたアツシは何を思っていたか。

Handwriting practice area with horizontal dashed lines. An illustration of a man and a woman is positioned on the right side of the page.